

連載コラム



第24回

キイチゴとノイバラ



もとよし ふさお  
本吉 總男

2016年6月

キイチゴはイチゴがなる落葉小低木の総称で、外来のラズベリーやブラックベリーは栽培種としてよく知られていますが、日本にも多くの野生のキイチゴがあります。その多くはみずき野周辺には見られませんが、モミジイチゴ、クサイチゴ、ニガイチゴ、ナワシロイチゴはよく見かけます。

キイチゴの熟した実は甘く、美味しいので、散歩の途中1粒か2粒つまんで口にすることがあります。ただし枝に生えている鋭いとげには注意せねばなりません。

ノイバラもまた枝に鋭いとげをもつ植物で、うっかり触ると痛い目にあいます。みずき野周辺にはノイバラが多く、またテリハノイバラも野生しています。バラ園や植物園で見られる華やかなバラたちとは違い、ノイバラの花には清楚な美しさがあります。

キイチゴとノイバラは、とげをもち、花もよく似たバラ科の植物です。今回は、みずき野周辺に見られるキイチゴとノイバラについて述べることにします。

## 1 キイチゴの仲間

### (1) モミジイチゴ

葉のかたちがモミジの葉に似ているので、モミジイチゴ(紅葉苺)と呼ばれ、本州中部以北に分布しています。茎の高さは2メートル内外。キイチゴの中では花期が早く、花は3~5月に見られます。果実は5月下旬~6月頃黄色に成熟し、みずき野周辺のキイチゴの中ではもっとも美味です。



モミジイチゴの花 3月下旬 本町地区



モミジイチゴの実 5月下旬 本町地区

なお、モミジイチゴの近縁種で、葉が細長いナガバモミジイチゴは、本州の関西以西、四国、九州と朝鮮半島および中国に分布しています。

## (2) クサイチゴ

クサイチゴは林や藪のへりなどに生える高さ40センチ内外のキイチゴです。小さくて群がり生える様子が草のように見えるので、クサイチゴ(草莓)と呼ばれますが、もちろん草ではなくて木です。分布は本州、四国、九州、朝鮮半島および中国。花は4月下旬～5月上旬、実は5月下旬～6月上旬頃赤く熟します。



クサイチゴの花 4月下旬 本町地区



クサイチゴの実 5月下旬 本町地区

## (3) ニガイチゴ

ニガイチゴはクサイチゴと同様、林や藪のへりによく見かけるキイチゴです。茎の高さは60センチ内外。分布は本州、四国、九州。また中国でも見られます。花は4～5月に咲き、実は6月に赤く熟します。食べられますが、多少苦味があるので、ニガイチゴ(苦苺)と呼ばれています。



ニガイチゴの花 4月下旬 本町地区



ニガイチゴの実 6月中旬 本町地区

#### (4) ナワシロイチゴ

ナワシロイチゴは、日当たりの良い荒地や道ばたに生えるキイチゴで、茎は地面<sup>は</sup>を這って1メートル以上伸び、翌年その茎から高さ20センチ内外の枝を出して花を咲かせます。前述の3種と比べると花期が遅く、5～6月に花が咲きます。花は白い萼<sup>がく</sup>片と、赤紫色の花弁がそれぞれ5枚あり、萼片<sup>がくへん</sup>は水平に開きますが花弁は直立しています。実は6月中旬～7月上旬に赤く熟します。北海道から沖縄までの日本列島のほか、東アジア温帯～亜熱帯に分布しています。ナワシロイチゴ(苗代苺)の名は、苗代を作る頃に実が熟すことから名付けられたそうですが、現在の米作とは時期にずれがあるように思います。



ナワシロイチゴの花  
5月下旬 8丁目東隣接地



ナワシロイチゴの実 7月上旬 本町地区

#### (5) キイチゴと草本のイチゴの違い

ナワシロイチゴなどキイチゴの実を観察すると、1つの実にたくさんの粒がついています。このひとつひとつの粒が本当の実(果実)なのです。キイチゴの1つの花には、多数の雌しべがついています。雌しべが受精すると子房<sup>しぼう</sup>の部分がそれぞれ実になり、その集合が1つの果実のように見えるのです。



キイチゴの実

私たちが普段食べているイチゴには、「女峰」、「とよのか」、「とちおとめ」などいろいろな品種がありますが、いずれも江戸時代にオランダから渡来したオランダイチゴの改良品種です。オランダイチゴは多年草で、ランナーと呼ばれる茎を伸ばして増えま

す。オランダイチゴの花には多数の雌しべがあり、受精するとそれぞれの雌しべが瘦果そうかという小さな硬い果実を作ります。いわゆるイチゴの実の表面にぶつぶつ散らばって、多少陥没しているのが瘦果そうかです。甘くて美味しいイチゴの実は本当の果実ではなくて、花床かしょう(花の諸器官、すなわち花弁、雄しべ、雌しべを支える花の土台となる部分)が大きく膨らんだものです。子房しぼうそのものが実になる果実しんか(真果)ではなく、このように一見果実に見えて、子房しぼう以外の部分が発達して果実状になるものを偽果ぎかといます。リンゴ、ナシ、ビワ、イチジクや後述するノイバラの実ぎかも偽果です。

ヘビイチゴは草むらに生える多年草で赤い実がなります。オランダイチゴと同様、ヘビイチゴの実ぎかも偽果で、瘦果そうかは実の表面に突出しています。実に毒はありませんが、甘くも酸っぱくもなく、汁気が少なく、とても美味しいとはいえません。



ヘビイチゴの実

6月上旬 第2調整池北隣接地

## (6) キイチゴに因んで

春、未だ桜の華やかな季節、小道沿いにひっそり咲くキイチゴの花、特にクサイチゴの純白の花は心を魅するものがあります。

春の霞 こもらふみれば 木いちごの 一重のしろき 花明るなり  
北原白秋  
草いちごの 幽かすかなる花 咲きをりて わが歩みゆく 道は楽しも  
斎藤茂吉

万葉人がこの花を知っていたかどうかは不明です。ただし柿本人麻呂に次のような歌があります。

道の辺の 壺いちし師の花の いちしろく 人皆知りぬ わが恋妻こいつまは  
柿本人麻呂(万葉集2480)

(「道の辺の<sup>いちし</sup>壺師の花の」は「いちしろく」にかかる序詞。「いちしろく」は「著しく」の意。「私の恋妻は皆にはっきりと知られてしまった」という歌です)

この歌に現れる「いちし」は、一説にはクサイチゴであるといわれています。しかし、「いちし」には諸説があり、クサイチゴのほか、ヒガンバナ、エゴノキ、ギシギシ、ダイオウ、イタドリが該当するとして挙げられています(山田卓三・中嶋信太郎著『万葉植物事典』北隆館)。どの花がこの歌にもっともふさわしいでしょうか。

キイチゴの花も風情がありますが、実もまた見た目に素朴な美しさを感じます。

道のべに 木苺熟れて 人に逢はず 水原秋桜子  
子が告げし 木苺のみち 朝あるき 及川貞

## 2 ノイバラとテリハノイバラ

### (1) ノイバラ

ノイバラは日当たりのよい荒地にごく普通に見られるイバラで、北海道、本州、四国、九州と朝鮮半島および中国に分布しています。高さは2メートル内外。5月中～下旬に直径2センチほどの白い花をたくさん咲かせます。いたって旺盛な生命力をもつ植物で、茎や枝に鋭いとげがあり、必要があって取り除くには厄介な植物ですが、花は清楚で香りが良く、また秋には赤い実(花床由来の偽果)が美しく、人々に好かれる植物でもあります。ノイバラの実<sup>えいじつ</sup>はまた「管実」といい、生薬として用いられます。



ノイバラの花 5月下旬 8丁目東隣接地



ノイバラの実 10月中旬 8丁目東隣接地

主として利尿や下剤としての作用があるそうです。ノイバラの実は甘酸っぱいそうですが、生薬として利用する以外は、口に入れない方がよさそうです。

ノイバラは学名を *Rosa multiflora* といいます。*Rosa* は「バラ」、*multiflora* は「多数の花をつける」という意味です。バラの育種(品種改良)の専門家たちは、「多花性(多数の花をつける性質)」というノイバラの遺伝的な性質を鑑賞用のバラに導入するために、ノイバラを種々のバラと交配し、多花性で美しい花を咲かせるいろいろな品種を作り出しました。例えば、代表的なモダンローズの1つであるフロリバンダ系のバラは中輪の花を多数咲かせますが、その多花性はやはりノイバラに由来する性質です。

ノイバラは丈夫で土壌中の病原体に対する抵抗性が強いので、バラの栽培品種の接ぎ木の台木にも使われます。これはちょっと気の毒な役割です。

## (2) テリハノイバラ

日本各地にはいくつかのノイバラの近縁種が分布していますが、みずき野周辺で見られる種はテリハノイバラだけだろうと思います。

テリハノイバラはノイバラよりも葉の緑が濃く、ノイバラの茎は上方に向かって成長するのに対し、テリハノイバラの茎は横に伸び、地面を這<sup>は</sup>うように成長します。分布は本州、四国、九州、沖縄、台湾、朝鮮半島、中国。



テリハノイバラの花  
6月中旬 文化財公園

花期はノイバラより遅く、6月上～中旬に開花します。花はノイバラより大きく、花の数はノイバラほど多くありません。実はノイバラと同様、秋に赤く熟しますが、残念ながら写真は撮っていません。

テリハノイバラの茎は長く、地面を這<sup>は</sup>って広がるので、その性質を生かすべく、他のバラと交配することによって、いくつかのツルバラが育成されました。またノイバラと同様、バラの栽培品種の接ぎ木にも利用されています。

### (3) ノイバラに因んで

万葉集には、ノイバラを「うまら」として詠まれた歌がありますが、その頃はまだ花や実への関心はなかったようです。

道の<sup>べ</sup>辺の 茨<sup>うまら</sup>の末<sup>うれ</sup>に 這<sup>は</sup>ほ豆<sup>まめ</sup>の からまる君<sup>きみ</sup>を 別<sup>わか</sup>れか行<sup>ゆ</sup>かむ

あま はのこほり かみつよほろはせつかべのとり  
天羽郡の上丁丈部鳥 (万葉集4352)

(天羽郡は上総の国の郡。道の辺の茨にからみつく豆のようにしがみつくあなたと別れて行かねばならない。防人として愛する人と別れゆくときの歌だそうです。)

ノイバラを愛でることは平安時代に至っても、ほとんどなかったようです。清少納言は枕草子の「名恐ろしきもの」の中に、「むばら(イバラのこと)」と「からたち」を入れています。どちらも鋭いとげをもつ植物として、良い印象を持っていなかったのでしょう。

ついでながら、「薔薇」と書いて「バラ」と読むのが通常です。しかし中国ではもともと「薔薇」はイバラを意味していたようです。日本語では「イバラ」の「イ」を省いて、「バラ」という語ができたそうです。ですから日本語の「バラ」を漢字の「薔薇」に当てたのです。

北村四郎・村田源著『原色日本植物図鑑』(保育社)によると、日本では古くは「薔薇」は「そうび」と呼ばれ、コウシンバラを指すのだそうです。コウシンバラは「庚申ばら」の意で、四季咲きという意味があるようです。コウシンバラは平安時代に中国から渡来し、栽培されました。花の直径は5~7センチで花色は淡紅色から紅紫色で見栄えのするバラです。イバラ嫌いの清少納言も、「薔薇(そうび)は近くて枝のさまなどはおつかしけれどをかし」(『枕草子(能因本)』)と書いているところを見ると、このバラは気に入っているようです。

話をノイバラに戻します。ノイバラを見たときの感動をもっとも如実に表現しているのは蕪村の句だろうと思います。

花いばら こきょう 故郷の道に 似たる哉  
 路たえて か 香にせまり咲く いばらかな  
 愁ひつつ うれ 岡にのぼれば 花いばら

与謝蕪村

明治以降には、多くの歌人、俳人によって、ノイバラが詠まれるようになりましたが、蕪村の句の影響も大きかったのだらうと推測しています。

ノイバラの季節は5月。昆虫たちが活発に飛び回る季節です。ノイバラはそのたくさんの花と強い香りで虫たちを誘います。花に集まる虫たちはノイバラの花が大好きなようです。



ノイバラとクマバチ  
5月中旬 8丁目東隣接地



『ぶんぶんぶん』 村野四郎作詞 曲はボヘミア民謡より



ぶんぶんぶん はちがとぶ  
 おいけのまわりに  
 のばらがさいたよ  
 ぶんぶんぶん はちがとぶ

ぶんぶんぶん はちがとぶ  
 あさつゆきらきら  
 のばらがゆれるよ  
 ぶんぶんぶん はちがとぶ



クマバチ、マルハナバチ、ミツバチなどが喜々としてノイバラの花にやってくる様子が実に生き生きと歌われています。ノイバラの咲く頃いつも思い出す童謡です。